

受付番号

留学・研究計画書

氏名 白谷 望	留学機関名 ムハンマド5世大学
留学先国名 モロッコ王国	留学期間 西暦 2011年 1月 ~ 2012年 12月
研究テーマ 現代モロッコにおけるイスラーム主義政党と権威主義体制をめぐる研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>1970年代から「民主化の第三の波」が世界各地に押し寄せてもなお、多くの中東諸国が権威主義体制を維持しており、その持続メカニズムの解明は、現在の比較政治学にとって喫緊の課題となっている。共和制を採用する多くの中東諸国は、クーデターや革命を経て成立した政権によって統治されている。他方、王制採用国であるモロッコの国王を中心とした支配体制は17世紀に確立されたものであり、独立後の近代国家建設の過程を経てもなお、制度的な形を変えながら現在まで存続している。これは、共和制国家の支配の正統性が、時を経るにつれ色褪せることが避けられない「革命の記憶」に依拠しているのに対し、イスラームに支配の正統性を求めるモロッコの権威主義体制がより強靱であることを表している。つまり、共和制を採用する他の中東諸国以上に、モロッコの権威主義体制には綻びが生じづらいと言える。</p> <p>このようなモロッコで1997年、イスラーム主義を掲げて既存の政治体制に挑もうと試みるイスラーム主義政党「公正開発党」（現在第2党、国内最大野党）が法的認可を得て、議会選挙への参加を果たした。しかし、国王による支配構造は、同じく「イスラーム」に正統性を求めるイスラーム主義勢力を政治領域に参入させても一向に揺らぎを見せることはなく、その統治体制は盤石であることが再度証明されることとなった。</p> <p>イスラーム主義運動／組織に関する既存研究において、合法的立場を得て民主的議会制度を通じて活動を展開するイスラーム主義政党は、「新たな民主化勢力」として捉えられてきた。しかしモロッコでは、公正開発党が政治領域に参入したことにより、イスラーム主義勢力の躍進に不安を抱く反体制派の左派・世俗主義系政党が、進んで国王中心の支配勢力に取り込まれていくという状況が生まれた。同時に、合法組織となった公正開発党は、公的な領域外で活動を行う他のイスラーム主義と一定の距離を置くことが求められた。つまり、公正開発党の政治参加は、政治領域だけでなく、イスラーム主義組織間にも亀裂を生む作用を持ち、民主化促進に貢献しうる反体制勢力間の協力関係を不可能なものとしたのである。要するに、反体制勢力として政治参加した公正開発党は、逆説的ではあるが、実際には権威主義体制の延命強化に寄与しているのではないか、と考えられるのである。</p> <p>このことから、申請者の研究目的は、既存の研究のような公正開発党そのものの分析から、体制および反体制勢力の双方へと視点を広げ、モロッコにおける権威主義体制の延命要因の解明を通じて、反体制勢力である公正開発党の政治参加と体制持続の因果関係を明らかにすることである。またこれは、イスラームに基づく政治体制とイスラーム主義政党との「イスラーム」の名を冠した権力闘争の動態を解析する試みでもある。</p> <p>本研究は、中東地域に関する政治体制研究において、未だ手がつけられていない王制採用国であるモロッコを対象とすることにより、他の共和制国家より体制持続が予想される盤石な権威主義体制の持続メカニズムを解明するものである。そして、未だ進展しない中東諸国の民主化問題に対し、新たな視座を提供しようとするものである。</p>	

成果報告書

記入日 2013年 4月 18日

氏名	白谷 望	留学先国名	モロッコ	所属機関	ムハンマド5世大学
研究テーマ：	現代モロッコにおけるイスラーム主義政党と権威主義体制をめぐる研究				
留学期間	2011年	7月	～	2013年	3月
<p>2011年初頭からのアラブ諸国の「政変の波」は、堅固と言われた権威主義体制を崩壊させ、政治改革へと導いた。この政変の波は、アフリカ大陸の最西端に位置するモロッコも例外とせず、全国各地で反体制デモが勃発した。しかし、ムハンマド6世国王はこうした動きに迅速に対応し、憲法改正の実施と国民議会選挙の前倒しを国民に約束した。そして、その憲法改正案は、それまでの国王の政治的権限に一定の制限をかけたものの、曖昧な表現を多く残し、国王の不可侵性条項はそのまま残されているにもかかわらず、国民投票で98.5%という数字で支持された。次いで実施された国政選挙では、反体制政党として活動を展開してきたイスラーム主義政党「公正開発党」が晴れて第1党となったが、現段階では政治体制そのものには一切揺らぎが見られない。つまり、他のアラブ諸国とは異なりモロッコにおいては、国王・体制側が「政変の波」をうまく吸収することによって、支配体制をさらに強化することに成功しているのである。これは、私自身がこれまでの研究で明らかにしてきた、同国の支配体制の盤石性を再度証明する事例となったと考える。</p> <p>こうした同国の政治の重要な転換期に留学を開始したわけだが、まず初めに、2011年7月に行われた憲法改正をめぐる国民投票と、同年11月に実施された国民議会選挙に関する情報の収集に努めた。国王主導の憲法改正案への国民投票は、本留学の目的の1つであった国民の政治意識を理解するために重要な事例であることから、新憲法に対する反応の傾向を、地域や学歴、年齢、職業の違いから明らかにしようと試みた。しかし、当局が国民投票に関する詳細な数字を公表していないことから、同作業は難航した。そこで、同改正案に対する国民の代表としての各政党の姿勢を、様々な資料を用いて項目ごとに整理した。また、2011年以降の国王主導の「上からの政治改革」において、その試金石として実施された憲法改正は、98.5%という驚異的な数字の支持を集めた（とされる）ことから、君主制や国王の絶対的権威に関する議論を不可能とする雰囲気を作り出すとの仮説を立てた。そして、国民議会選挙での発言や議会での討論などを丹念に調査することにより、この事実を確認した。</p> <p>次いで、当初の予定から前倒しで実施された同年11月の国政選挙では、①公正開発党を中心に、政治主体間の競合関係の動態を明らかにし、②公正開発党の支持・動員基盤を分析することに努めた。まず、自身がこれまで研究対象としてきた公正開発党の選挙キャンペーンに同行し、党員や支持者に聞き取り調査を行うなどして、同選挙における支持者動員の戦略・構造を明らかにすることを試みた。また、</p>					

選挙当日には、選挙会場において投票状況を視察した。次に、収集した選挙結果をデータ化し、過去の選挙結果との比較から、同選挙の特徴や公正開発党の支持層拡大の傾向などを洗い出した。これらの分析に関しては、2012年5月の日本中東学会第28回年次大会において『上からの改革』後のモロッコにおける権力構造の再検討—2011年国民議会選挙の分析を中心に」という題目で、そして、同年12月の東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ペイルート若手研究者報告会において「Reexamining the Islamists' Triumph in Morocco after the Arab Spring: A Study of the 2011 Parliamentary Election」という題目で、それぞれ報告を行った。これらの報告では、チュニジアのナフダ党やエジプトのイスラム同胞団の事例を中心に、「政変の波」の特徴の1つとして捉えられているイスラーム主義勢力の躍進が、同じくイスラーム主義政党が勝利を果たしたモロッコにおいては、国王・体制側の新たな戦略であったことを、選挙制度や結果の分析から証明した。その後、国内外の研究者から頂いた同報告に対するコメントを踏まえ、ジェトロ・アジア経済研究所の『アジア経済』に論文を投稿した（現在、査読結果待ち）。また、公正開発党の政党政治／議会政治への戦略の動態・変遷を明らかにするため、2007年の国政選挙における同党の戦略の意思決定過程を分析したものが、論文「現代モロッコにおけるイスラーム主義政党の組織戦略—政権獲得をめぐる意思決定」として、2012年2月に上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科から刊行された。

加えて、公正開発党の基本理念や行動指針などをより深く理解すべく、同党の母体組織であり、現在も社会活動を継続するイスラーム主義運動組織「統一と改革の運動」の組織憲章を全訳した。同翻訳は、自身のアラビア語の学習の一環であっただけでなく、これまでの研究では扱うことの出来なかったイスラーム学の勉強にもなった。また、自身では解釈出来ない箇所に関しては、直接同組織の事務所を訪れ確認した。そして、同翻訳に解説を加えたものは、『モロッコのイスラーム主義運動「統一と改革の運動」とその憲章』という題目で、上智大学アジア文化研究所・イスラーム研究センターのワーキングペーパーシリーズNo. 18として、2013年2月に刊行されている。

また、受け入れ先のムハンマド5世大学の政治学方法論の大学院授業において、こうした研究の進捗状況や成果に関する報告を何度か行い、現地の教授や若手研究者との意見交換を行った。これは、私自身の研究に対する現地の研究者の反応や捉え方を知ることの出来る大変貴重な機会となった。またそこでは、現地研究者の持つ情報量の豊富さに刺激を受けると同時に、情報収集の後に必要となる分析枠組みや方法論など、現地の研究者が不得意とする分野の重要性を認識するようになった。こうした経験は、日本国内に留まることを望まない自身の研究の強みを再認識するきっかけとなり、さらに、互いの長所を生かす形で、現地の若手研究者と今後の共同研究を計画することにもつながっている。

自身の今後の研究に関しては、モロッコの権威主義体制構造の大枠ともなる、国王を中心とした支配勢力の全体像の把握、およびそれに「寄生」し、それを支える政治階層（とりわけ軍と官僚）や企業家層に着目し、その同心円的な支配構造を明らかにする。この作業は、まず今回の留学で入手した様々な資料の読み込みと分析を中心に行い、必要に応じて追加の現地調査を行う予定である。そして、これらの研究成果をまとめ、博士論文として提出する。

[留学の感想]

1年9ヶ月のモロッコでの留学生生活を終えて強く思うことは、①通年の調査の必要性和、②現地語の修得と理解の重要性である。

私と同じ現代政治を専門としている他の研究者を見ると、1年以上現地で調査を行う者はあまり多くない。学位論文の提出をはじめ、ある事象に対する迅速な分析や研究成果の発表を求められる政治学分野では特に、研究対象とする地域での長期調査の重要性が看過されてきたのではないかと考える。

しかし、モロッコに長期滞在してみると、同国における市民の生活と年間行事を通じて、その文化をより深く理解することができ、そのことが自身の専門とする現代政治の把握にも不可欠であると感じている。例えば、アラブ政変の波を受け、前倒しで実施されることとなった国政選挙の実施日程を決定する際、当初発表された日程が、ムスリムが非常に重視する祭日の犠牲祭の日に非常に近く、これに国民は大きく反発した。こうした情報をインターネットで入手することは可能だが、そもそもモロッコ国民が宗教儀礼をどのように捉えているのか、また、宗教儀礼が如何なる形で現在の社会で展開されているのか、こうしたことは、一定期間現地に滞在し、現地の人々と共に生活しなければ、理解出来なかったであろう。約2年間滞在し、モロッコの人々とともに生活し、年間行事を全て経験出来たことは、今後の研究上の理解を一層深めてくれると考える。

語学に関しては、モロッコで生活する上での日本で学習してきた正則アラビア語（フスハー）の限界と、アラビア語モロッコ方言修得の必要性を痛感した。というのも、モロッコ人は正則アラビア語を理解することは出来るが、その日常会話においては、フランス語やベルベル語（先住民の言語）を併用した独自のアラビア語を使用している。つまり、正則アラビア語ではなく、モロッコ方言でコミュニケーションを図った方が、より広範な人々と会話することができ、加えてその会話から彼らの考え方や文化を理解することが出来る。だが、その修得は予想以上に大変なものであった。エジプト方言などとは異なり、モロッコ方言は未だ体系化されておらず、その辞書や文法書が存在しないことから、初めに語学学校でその基礎を勉強した後は、現地の人々との会話から単語や表現を学ぶしか修得の方法がないため、それらをひたすら整理し、独自の単語帳を作成した。しかし、モロッコ方言を話すことの出来る外国人が非常に少ないことから、モロッコ方言で人々に話しかけると、驚きの後には笑顔を見せてくれ、心を開いて接してくれる。こうして現地の人々と同じ言葉でコミュニケーションを図ることの重要性を実感するとともに、こうした方言の修得は、現地での長期滞在なくしては不可能であったと強く感じている。また、モロッコ人による状況に応じた言語の使い分け（モロッコ方言、正則アラビア語、フランス語など）に遭遇することもまた、彼らの考え方や文化を理解する一助になった。

そして、こうした現地語の修得により、現地の人々やモロッコ人研究者が、自身の研究に対し興味を持ち、より親近感を持って協力をしてくれた。日本においては、他のアラブ諸国との比較的な視点や、政治学的な観点から意見を頂くことが多い。しかし、モロッコを研究対象としている研究者が非常に少ないことから、モロッコ研究そのものは未だ不十分であり、モロッコ人研究者とは詳細な情報の交換が不可欠である。そのため、日本での研究とモロッコでの現地調査を今後も繰り返すことになるが、その際には、今回の留学での経験を生かし、現地語の更なる修得に努めたいと考えている。



国民議会選挙後の公正開発党党大会にて。アブドゥル・イラーフ・ベンキーラーン新首相。



ラマダーン期間中の断食明けのご飯。



サハラ砂漠での日の出。